

カメレオンで 何が悪いの！



高 木 徳 一

重力に従い真つ直ぐ落下する水流が滝壺に激突し、飛沫が四方八方に分散する。

（操さん、暫く振りの虹ですよ。虹の橋を渡りましょう）（そうだね、秀子さん。白黒写りで、燃えるような紅葉色は見えなくて残念だけど）（相変わらず、操君はスターだぜ）（冗談はよせよ、源吉さん）（ほら、見えるでしょう。あの滝見台の土産物屋で『巖頭之感』の遺書と学生服姿の細面の写真が今でも飛ぶように売れますから）（私も一目だったらスターになれたかしらう）（無理、無理！）（だったら俺は警察に自殺者のいない滝を聞いてから飛び込むぜ。操君は一高生のエリートで辞世の詩をミズナラの木を削り書き残し、世間をアツと驚かせたからなんだ）（それもそうね、一介の女学生なんか取り上げてもらえないわね）（それに、三十一年後に華嚴の滝と中禅寺湖が国の名勝に指定され、日本三名瀑の一つになるから、操君

は先見の明があつたわけだ。俺の場合は、長男だから仕方なく農業を継いだが、文学青年崩れで新聞を読んで共感し、翌日には飛び込んでしまったな）（せっかちだったのね。私は三日間死すべきか生きるべきか小さい頭をひねつたものよ）（巷では遺書に示されたように、哲学的思索を巡らし、幾ら悩んでも世の中の真相は分からなくなり、『立身出世』を美德とする世をはかなんでの投身自殺と騒がれてきた。その後、失恋や先生に叱られた事実がマスメディアに嗅ぎつれられているけれど、実際はどうなんだね、操君。本人の口から聞くのが一番だわ）（私も知りたいわ。後子のため）（無駄だよ、現世に戻れないのだから）（仏教には輪廻転生なる言葉があるわ）（今から六十年前の事だから時々刻々移り変わる心理状態を再現するのは難しいな。枕草子や更級日記のように日記を残しておけばよかった。雪界の親友だから話すよ）（嬉しいわ）（先ず、失恋の件だけど、確かに数字

者で政治家であつた菊池大麓氏の長女多美子さんとは恋仲であつたが、彼女は憲法学者の美濃部達吉氏と結婚してしまつた。彼は後に法大、教育大教授から都知事に転進した亮吉氏の父親に当たる。やはり、地位や財産目当てかと呪つたよ。何故なら、僕の祖父は盛岡藩士で、父が明治維新後北海道に渡り、事業を成功させ、屯田銀行の頭取まで上り詰めたが若くして死んでしまい家運は傾いてしまつたんだ。東京に移つて、京北中学から第一高等学校に進学した。そんな二年生の折り、彼女と知り合つたが、直ぐに失恋してもやもやしていつた四月に、英国留学を終えた夏目金之助（漱石）講師が英文学の担当になつたんだ。先生は松山の中学教師から熊本の五高教授を経て、抜擢され国費留学をして立身出世街道をまっしぐらに走つてゐた。先生は輝き、自分は対極の落ちこぼれ。勉強にも身が入らず、下読みをして行かなかつた。そしたら、二回目に『やる氣がないなら教室に出

る必要が無い！』ときつく叱責されてしまつた（そうだったの、可哀相。教育者なら教へ子の表情を読み取り、落ち込んでいる理由を聞いて手助けするのが当然でしょうに）（そうだよな。操君もエリートと思つていたが、上には上が居るもんだな）（先生にも失恋もどき事件があつたらしいが、今は昇り竜でその痛手は忘却の彼方だったのでしよう。しかし、小泉八雲先生の後任として自分が卒業した東京帝国大学文科大学英文科講師も兼任していたが、分析的な硬い講義が不評で学生による八雲留任運動が起き、それに僕の自殺で、先生は神経衰弱になり、奥さんとも二ヶ月別居してたとの風の噂だった。松山で知り合つた正岡子規氏の弟子の高浜虚子氏が神経を和らげるためだからと執筆を勧め、処女作『我輩は猫である』を世に出すと、大好評となつたそう。次々と作品を書き上げ、作家として生きることにしたそうなんだ。四年後には一切の教職を捨て、朝日新聞社の専属

作家になって、後世から国民的大作家の称号を得た（操君は先生の人生を大きく変えたから文学史上に多大な貢献をしたわけだ。大したもんだよ）

（そう言う見方もあるな、源吉さん。慰めてくれて有難う）（操さん、そろそろ虹も消え始めてきたわよ）（結局は自殺の原因はどうなるんだな？）（失恋、叱責の合わせ技になるかな）（それなら、遺書にはつきりとそう書けば良いのに）（そこはエリートの欠片が残っていたので、かつこをつけて哲学的な一文にしたのだよ。遺書の最後に『大いなる悲観は大いなる樂觀に一致するを』の所で、その悲観に失恋と叱責事件を含ませているんだよ）（そうなんですか、凡人には分からないわ）（彼女や先生を苦しめたいという思いは、遺書をしたため、巖頭に立った時点では消滅していたんだ。だから書かなかった）（何だか、私は死に急いだって感じね。恋愛や失恋など人生の醍醐味を味わわなかったんですもの）（今からでも遅くないよ。僕に恋す

れば）（こんなお婆ちゃんでも、いい？）（霊界では歳は止まっているから大丈夫さ）

源吉のだみ声に二人は視線を交わし微笑んだ。

「華嚴の滝は凄いい迫力だなあ！」

長身で彫りの深い顔をした幹事の町中保が高い声を張り上げた。

「下の方に虹が見えるわよ」と大柄な清水恵美が細い声を上げ、手摺りから身を乗り出す。

「何処だよ？」「ほら、滝壺の近くよ」「神秘的だな」「トーし、ここで集合写真を撮ろう」

町中は傍にいたアベックの長髪の男性にカメラを手渡し、男子十名、女子八名をネガに写して貰った。

赤、橙、黄や茶色の落葉樹の中に、緑の常緑樹も存在感を見せ付け、直下型の華嚴の滝に彩を添えている。絶壁の中段以下から伏流水が糸のように流れ落ち、本流と共に滝壺に飲み込まれていく。

恵美の脳内が空白になり、身体が前方に揺れる。

「エレベーターで、滝壺に降りましようよ」「その前に、お店に寄ってからにしましょう」

幹事が皆を土産物屋に導いた。絵葉書、日光湯葉のお饅頭、カステラなどをわいわい言いながら品定めし買っている。

「おい、このポストカードを買おうじゃないか、面白れえぜ」「何だよ、それは？」

「自殺一号者の写真と辞世の句だそうだ」「聞いた事がある。名前は忘れたけど、昔一高生が遺書を残して、世の中に絶望して滝壺に飛び込んだのよ。後追いがはやつて、ここは一躍自殺の名所になったわけ」「壁に説明が書かれているわ」

菊池早苗の澄んだ声に誘われて、恵美の目が字を追った。

——明治三十六年五月二十二日に旧制第一高等学校（東大の前身の一つ）二年生の藤村操学徒が樫の木を削り、『巖頭之感』と題する遺書を残して投

身自殺した。時に満十六歳十ヶ月。彼に影響を受けた自殺者が相次いだため『自殺の名所』の評判が立った。死後四年間で自殺を図った者は一八五名で、四十名が死亡した。遺書の本は伐採され、巖頭に近寄れないように立ち入り禁止の柵が設けられた。彼の亡骸は東京都港区に在る都立青山霊園に埋葬されている。

巖 頭 之 感

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て比大をはからむとす、

ホレーシヨの哲學竟（つい）に何等のオーソリチーを價するもので、

萬有の眞相は唯だ一言にして悉（つく）す、曰（いわ）く「不可解」。

我この恨を懷いて煩悶、終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。

始めて知る、大いなる悲観は大いなる樂觀に一致するを。」――

「巖頭之感はこむずかしい文章だな。こちとらにはちつともわからねえや」

中川健二が坊主頭を搔きながら、ぶつきらぼうな声を張り上げた。

「何を言ってるのよ、私達と同一歳位じゃないの。しつかり読みなさいよ」「無理よ、朝子（とも）さん。彼は東大生なんですもの、私達とは月とすっぽんよ」と小太りの菊池早苗が口を尖らし喋った。

「結局何が言いたかったんだ、藤村君は？」

寝癖がついたような髪の下に寝ぼけた目をした坂爪幸太郎が言い放った。

「全部は理解出来ないけれど、悠久なる宇宙や過去、現在について、この小さな身体で色々と考えたと言ってるわ。しかし、万物の真相は、何も分

からず、『不可解』の一語に尽きると。この難題を抱えて悶え苦しみ抜いた結果、死を決意したと。事ここに至って、何ら不安を持たなくて、悲観は樂觀に置き換えれば良いと初めて知ったと言ってると思うの。当人ではないから正確な解釈は出来ないけれど」「大したものね、朝子さんは」と恵美は言い、長い首を幾分下に向けながら感心した表情になる。

「私は文芸部にいたから文章は読み慣れてるの。でも、ホレーシヨの下りは分らないわ」「それにしてもよう、十六歳で死ぬなんて考えられないな。おらなんか、やつと勉強から開放されて、稼いだ金で大いに遊ぼうとしてるのに」

骨太で首のない飯島次郎が口を挟んだ。

「そうだよな。折角生まれてきたのに、はいおさらばじゃ寂しいわ、人生を目一杯愉しまなくちゃ」細面の顔にギョロ目が光る三浦宏が同調した。

「私も自殺なんて考えられないわ。楽しく過こし

天寿を全うしたいわね。やはり、頭の良い人は凡人には及びつかない事を考えて、死に急ぐのかしら」「そうよ、恵美さん。天才や秀才の頭には、私らの何十倍もの神経があつて、経験しなくても未来が予測出来ちゃうの。だから自分と世の中の将来を悲観して生きてる価値がないと判断したのよ」

ビヤ樽体型の幹事の成本満子がコメントを加えた。当時は日清戦争に勝利して富国強兵策を推し進めていた時期だから、戦争に狩り出される不安もあったのかもしれないな、と町中幹事が歴史の知識の一端を披露する。

「記念にこのカードを買つておこう」「止しなさいよ、三浦君。彼の霊が乗り移つて自殺したくなるわよ、きつと」恵美が止めに入つた。

「大丈夫だつて、三浦君は野球部のエースで三番バッターですもの」

早苗が否定意見を述べる。

私と同じように、三浦君は顔も身体も細身で神経質そうだから悩みの底に落ちそうなタイプにみえるわ、とうつすらと口紅を着けている香が恵美に加勢する。

「試しに俺も買つてみるわ。もし、自殺したら線香の一本でも上げてくれや」

「そりやあ、面白い。おいらも乗つたぜ」「私も」連鎖反応が起こり、男性六人と女性三人が購入した。

恵美は縁起でもないとその場を早々に離れる。

幹事の号令で、一行は表に出て、鉄道駅のように見える二階建て和風建築の中に入つた。エレベーターの前はかなりの行列である。団体割引を利用して、エレベーターに乗った。降りて、自殺者の霊を弔うための観音像に頭を垂れる。地下道を歩いて観瀑台に近付くにつれ、音が徐々に大きくなり、視界が開けると耳をつんざくような大音響が脳を破壊するかと思われ、皆は一斉に両手で耳を

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。